



1 検討委員会で出された意見等

◆ 意見等は、主な論点ごとにまとめてある。意見等についても可能な限り検討・活用されたい。

1 目的

- 「地域福祉を担う人材の育成」および「育成した人材を活かす仕組みづくり、仲間づくり」という区の考え方について、異論はなかった。

2 機能

- 「学生向けの機能」を主な機能としつつ、「区民向けの機能」にも配慮するという区の考えに異論はなかった。

3 位置付け

- 「住民による地域福祉充実のため区が任意に設置する実践的な教育機関」という区の考え方に異論はなかった。

4 特色

- 1) 「福祉資源などさまざまな地域資源を活かした実践的な教育機関」「単発、短期の学習では得られない知識、スキルの取得、仲間づくり」「専門分野のみならず、地域福祉全般の知識の取得」および「学びを共にする仲間、講師などとの交流を通じ充実した学生生活」という区の考え方に異論はなかった。なお、委員からはつぎの意見が出ている。
- 2) 趣味や教養、生涯学習などの事業に参加した結果、ボランティアの現場などに進む人がいるが、趣味や教養、生涯学習などの事業とカレッジの差別化が必要である。
- 3) キャンパスライフで普段出会わない人同士がつながること、仲間をつくり何かしようという場をつくるのが目的であれば、高齢者福祉、障害者福祉、子育てという専門分野別に人が集まるのではなく、違う分野の人が集まって、同じ目線で話し、仲間をつくるのが、カレッジの特徴になるのではないか。

- 4) なぜ、練馬区でカレッジを開設するのかこだわらなければならない。カレッジを作るということは、「練馬で活動に取り組んでもらいたい」「練馬の地域実態を知ってもらいたい」ためではないか。
- 5) 活動している人の「スキルアップ」と新しく活動を始める人の「ボトムアップ」、ネットワーク化を進める「キープアップ」という3つのアップを広げていったらどうか。
- 6) 学んだ知識を正当に評価してもらうために、区がライセンスを発行して欲しい。
- 7) 区から学んだことに対する証明書などを発行して欲しい。
- 8) 資格とまでいかななくても、何らかの評価システムが必要ではないか。

5 人材の育成

(1) 知識、スキル

- 1) NPOでは、現場の専門的な知識と同時に、税務、社会保険、人事管理、給与計算、登記、会社設立、労働基準法などの知識を求められる。
- 2) 期待すべき人材の資質は、倫理的な問題とスキル、知識とを分けて考えるべきである。個人情報をお安易に話してしまう人はパーソナルなサービスはできない。
- 3) 福祉を担う人の「スキルアップ」が大事である。
- 4) 育児支え合い(ファミリーサポート)事業を例にとると、家庭で子どもを預かる援助会員としてのスキルと、事業を地区単位で広め制度化していくスキルとは別物であると考えられる。これらを人材の育成という言葉でひとくくりにせず、現場ごとにどんな人材が必要かを明確にしていくことが大切である。必要なスキルを段階的に区分けすることが必要である。
- 5) 子育て支援では、子育て支援の有資格者・経験者、地域の活動を根付かせる人材が欲しい。
- 6) 具体的なニーズに応えてくれる人。障害者や高齢者が外出する際、車いすを押してくれる人。介護保険施設等に入居している高齢者を自宅まで送り迎えしてくれる人。
- 7) 学童クラブや地域集会所など小規模な施設を運営できる能力を持った人。運営する上での人事管理、会計処理、利用者の対応などができる人。
- 8) 福祉サービスをビジネスに結び付けてくれる人。事業のための運転資金を調達できる人。

- 9) 会社勤務の経験やさまざまな分野での経験をNPO等で活かせる人。
- 10) 地域で活動する場合、スキルを身に付けることは大事だが、やる気やサービス精神はもっと大切だと思う。

(2) 相談、コーディネイト

- 1) 直接ボランティアするのではなく、コーディネイトする人も大切。
- 2) 何でも相談できる相談ネットワークのコーディネーター。情報を知らせる人、コーディネイトする人。
- 3) 地域福祉のポータル機能を持つ人がいれば利用者は便利。一定の研修を受け、NPOや支援団体、手助けの内容などを把握している人。適切な情報を対面で話しかけることができるコーディネーター。
- 4) 総合的な相談に応じてくれる人、何でも相談できるような人がいれば便利。
- 5) 今、孤立や孤独の問題に対応するための話し相手のボランティアが求められている。
- 6) 小さな相談は民生委員に相談しにくい。ささいなことを相談できる人が欲しい。
- 7) 敷居が高くなく、気軽に相談にのってくれる人がいるとよい。
- 8) コーディネーターは専門的な能力を要する難しい仕事である。コーディネーターは、相談技術が必要である。活動場所がどこにあるのか、ニーズがどこにあるのかなど情報収集能力が必要である。人と人とを結びつけるマッチング能力が必要である。プロに徹しなければコーディネーターはできない。プロとは別に、人と人を結びつける地域のコーディネーターが必要である。
- 9) コーディネーターには、いろいろな専門分野があってそれぞれに強みがあれば良いといった認識を持っている。

(3) 情報提供

- 困っている区民にはっきりと説明する能力のある人。区民が困っていることを行政に明確に提示できる人。

(4) 発見

- 1) 孤立している人や孤独死のおそれのある人を発見してくれる人。
- 2) 健康な高齢者と特定(虚弱)高齢者を結びつけることができる人。閉じこもっている高齢者を家の外に連れて行ける人。

(5) その他

- 1) 社会福祉協議会の福祉協力員や民生委員の活動などは、1人の区民が兼ねていることが少なくない。そのため、地域福祉を担う人々の養成が急務となっている。
- 2) 「会社人間から地域人間にいかに移行するかが課題である」ということを耳にすることがある。仕事のうえでは有能な人でも、地域のことになると経験が足りない新人といえる。会社人間から地域の活動者となってもらうためには、そのための取り組みが必要である。「新人」に働きかけ、底辺を広げることで「ボトムアップ」することが大切である。

6 地域資源との連携

- 1) 時代は刻々と変わっている。時代に合ったネットワークづくりを考えて欲しい。
- 2) 社会福祉協議会との連携が大切。連携のしくみづくりがあるとモチベーションが高くなる。
- 3) 当事者やボランティア活動の経験者、専門家は資源である。また、地域住民、人も大事な資源である。
- 4) 大学も資源となりうる。空き店舗も使われていない資源である。
- 5) 学習の資源、教材は地域に眠っている。
- 6) 町会や自治会とのつながりが見える工夫があったほうがよい。
- 7) 退職者の中には社会保険労務士などの専門家がいるので、そういった人をうまくコーディネートして、NPOなどの組織に送り込むことが重要である。
- 8) NPOで活動している方、これから活動を開始しようとしている方が、カレッジとともに学び交流することができれば、活動を開始しようとしている方がそのNPOに新たに仲間入りすることも考えられる。

7 学生同士の交流の促進

- 学生が学生を支援するティーチングアシスタントという活動がある。学生が1年目から動機が持てるように、先輩の学生がアシスタントとして付く制度である。

8 活動の仕組みづくり、仲間づくり

- 1) カレッジの中心になると思われる退職者や団塊の世代をカレッジに取り込むためには、受け皿を担保する必要がある。
- 2) ゴール設定がないと勉学期間が終わるころには、学生がいなくなってしまうのではないか。資格の取得など目的を明確にすべきである。
- 3) 学んだ成果を卒業後にどのように地域で生かしていくかを考えなければならぬ。
- 4) 民生児童委員の後継者が少ないことが問題となりつつあるのではないか。将来的には民生児童委員の後継者の育成を目標にすると受け皿が広がるのではないか。
- 5) 出口をたくさん提供する「人」が大切。提供された情報が学生のやりたいことと合致すれば一つの地域活動になる。
- 6) モチベーションを維持するためにも、しっかりとした出口が必要ではないか。例えば、出口として人材のデータベースを作り登録してもらうことも考えられる。
- 7) カレッジの創設とともに地域の受け皿を探し出して、頭に描けるよう努力が必要である。また、行政に頼らずに、住民も受け皿の発掘を行うことが大事である。
- 8) 専門的な相談より、日常のささいなことを聞いてくれること、励ましてくれること、ある意味で人間関係の再構築が大事である。
- 9) 卒業後の受け皿がないと、途中で頓挫する人が現れるのではないか。
- 10) 受け皿の担保がないと長続きしない。常に受け皿を意識したカレッジをつくる必要がある。
- 11) 入学した人が自ら出口を見つけだせるような仕組みづくりも可能ではないかと思う。

9 カリキュラム

(1) 体系

- 1) ユニバーシティでなく、カレッジなのだから、ターゲットとする分野を絞り限定したものをやるべき。
- 2) ケアするという視点から見ると、子ども、高齢者、障害者とも同じことを知らなければならない。縦割りとなっていた部分を、福祉を受ける側に立って考えていかなければならない。
- 3) 話を聞ける人、つなげることができる人、情報をキャッチできる人というのは、高齢者、障害者、子どもに分けなくても、共通のトレーニングで育成が可能である。縦割りの対象者別でなく、横の専門性の育成を検討する必要がある。
- 4) プログラムを実学にするのか、教養にするのか、連携にするのかを議論することが大切。
- 5) 「聞いて、見て、体験する」コースを受けてみたい。ただ受講して終わりというものには魅力がない。
- 6) 組織や活動などの話を聞いて、実際に現場を見て、体験するプロセスを経ることにより、地域で活躍している人との交流が育まれる。
- 7) コースは、いくつかのジャンルに分けて起業、NPO、公的機関、ボランティアなどにつなげる。縦軸と横軸に分けて構想するとよいのではないか。
- 8) カリキュラム・教育については、さまざまな設定が可能ではないか。できることから始めようという「実学」。文化を知って教養を広げる「知学」。お任せコースのように自分たちで課題を設定し、仲間を集めて行動に移す「実践学」がある。
- 9) 近隣に住む人とのつながりをつくりたいので、地域が近い人同士でグループを分けて欲しい。
- 10) 高齢者、障害者、子育てといった分野を想定しつつ、ステップアップやお金集め、組織の運営など共通の基礎知識を身に付けてから、各分野の学習に進む方法がある。
- 11) 一般大学の学生をカレッジで受け入れ、カレッジの学生と一般大学の学生がお互いに刺激を与えながら学ぶことも考えられる。また、カレッジの授業が一般大学の単位として認定される仕組みもつくれるのではないか。
- 12) 2年間の修学期間の中で、途中で他のコースに転籍できるシステムを作ると魅力あるカリキュラムになると思う。

- 13) 共通する基礎コースを学んでから「実学」「知学」「実践学」に移るカリキュラムもあれば、共通する基礎コースを学んだ後に「保育」などの専門分野に入っていくカリキュラムもある。
- 14) 他自治体の類似事例では、いくつかの大学が連携し「健康的な福祉のまちづくり」をテーマに具体的なカリキュラムの作成に取り組んでいる。
- 15) カレッジに入学する方の経歴や考え方は、同じ水準ではないだろう。カリキュラムの内容は多数と思われる地域活動の経験がない方に合わせることになるのではないか。
- 16) 地域で福祉活動をしている方には基礎的な学習が不要なのではないか。1年次を飛び越して2年次から入学するシステムがあってもいいのではないか。

(2) 内容

- 1) 上手なプレゼンテーションのやり方や補助金の確保の仕方などを取り入れたプログラムを考える必要がある。
- 2) カレッジでは常に新しい情報を教えて欲しい。
- 3) 高齢者の中でも、毎日歩いて健康な人もいるし、そうではなく体の具合の悪い人もいる。誰もがいきいきと暮らしていける方法を教え、学ぶことがカレッジの大事な役割の一つではないのか。
- 4) 練馬で成功している、あるいは活動で苦勞している福祉関係者から機能や組織形態、課題等を聞いて、現場へ行って実際に見て、一定の期間体験をさせてもらう。そのように構成されたものが魅力あるコースだと思う。
- 5) 座学ではなく、地域の方と関わり体験することでさまざまなことが見えてくる。体験する材料の中にプログラムのヒントがあると感じる。
- 6) 活動拠点の環境整備のための方策を課題として取り上げ、カリキュラムに入れる。学生がケーススタディ、フィールドワークしながら課題の解決に取り組んでいく。
- 7) 大学ならば学生が必要な講座を組み合わせる自分のカリキュラムを作ることが重要である。
- 8) 「実学」「知学」は多彩で、「相談援助技術といった知識を学びたい」「まちおこしをテーマに学びたい」「ネットワークの技術を学びたい」「ネットワークできる人を育成したい」などが考えられる。
- 9) 魅力あるカリキュラムについて考える必要がある。参加者が目を輝かせるような、参加者の気持ちが継続できるような方法を考える必要がある。

- 10) カリキュラムはインパクトがあって、行ってよかったと思わせる内容が必要。
- 11) 事業を立ち上げるに当たって必要なこと、一つの独立した団体として必要なことをカリキュラムに入れて欲しい。
- 12) 魅力あるプログラムは何なのか、自分が行ってみたいくなるプログラムを考えて欲しい。行ってみようかなというプログラムの例として、フィールドワークがある。座学ではなく、福祉の最前線に行って現実感を持ってもらおうと続けるのではないか。
- 13) 色々なことで共通性のある方でも、意見が食い違うことがある。正しい知識を得て意見の食い違いを防ぐことが大事だと感じている。
- 14) 大切なことは、パワーアップのために必要な正しい知識をネットワークにより広げていくことではないか。
- 15) 最近、地域コミュニティがかなり壊れてきている。カレッジは地域を考え直す場として欲しい。
- 16) 近所という狭い範囲ではなく、区全体を地域として捉え福祉活動を行う考え方がある。
- 17) 自分の活動をスキルアップさせるような、専門的知識が身に付くところが欲しい。大学で資格を取るまでの専門性がなくてもある程度のレベルに達した知識を身近な場所で身に付けたい。
- 18) 基礎コースとして、防災や防犯などを基本に地元を知ることから始めて欲しい。
- 19) 地域を知った後、専門分野を立ち上げて学生が自分の進路を見つけて進んでいけるようにしたらよい。
- 20) カレッジのカリキュラムという視点で考えると、具体的な課題について解決するプランづくりが考えられるのではないか。
- 21) カレッジが高齢者福祉、障害者福祉、子育てといった分類なら入ろうとは思わない。区が地域福祉を考えた特徴のある教育を目指すのならば分類が違うのではないか。行政の区割りが見え隠れするのは、相応しくないと感じる。
- 22) 練馬区を見つめ直すカレッジがあっても良いのではないか。練馬区の歴史や文化、昔から伝わる行事、史跡について勉強できる場を体系化することが考えられる。
- 23) 空き店舗の活用が重要であるが、あまりこの面ばかり強調するとカレッジとしての焦点がぼけるおそれがあるのではないか。また、練馬を知るなどの一般教養を学ぶだけではカレッジとして成立しないだろう。

- 24) 「聞いて、見て、体験して、そして振り返って、新しいプログラムをつくる」という、生徒主導でプランを組み立てることが考えられる。
- 25) 学生の能力を活かすためには、学生が自主的に行うことが必要である。始めは手助けするが後は任せる、必要が生じたら支援するというお任せコースがあってもよいのではないか。
- 26) ケーススタディやフィールドワークはとても大事なことである。ケーススタディのケースのを見つけ方や学び方を学習していけばよい。
- 27) 専門講座では、「相談員を養成する講座」「子育ての講座」など、自分の活動領域がイメージできるようにする必要があるのではないか。
- 28) 失敗事例に学ぶ授業があってもよいのではないか。
- 29) サラリーマン時代に培ったスキルは活かせるものと活かさないものがあるのではないか。財務や会計、人事などといった専門的なスキルは活かしやすい。
- 30) 活かせるスキルを持った人でも、サラリーマン時代の肩書きにこだわる人は、NPO団体などでは、活躍できないことが多いと感じる。それは、昔の肩書きを忘れることができず、他人に命令してしまうためである。NPOは命令する人と命令される人という関係では成立しにくい。古いサラリーマン時代の殻を脱ぎ捨てるためのカリキュラムが必要なのではないか。
- 31) 地域の祭りや、防災活動などに参加するカリキュラムがあれば、地域に入り込むきっかけとなるのではないか。
- 32) 卒業時に、卒論のようなイメージで福祉に関する提言書を作成するシステムがあれば2年間にわたる修学の目標になるのではないか。
- 33) カレッジを運営していくに当たっては、関係機関・部門との連携が必要ではないか。
- 34) 共通基礎科目案として、練馬の地域福祉基礎講座を提案する。学習目標は、つぎのとおりである。①福祉のまちづくりを進めるため、区における生活課題を認識し、その解決に向け区民としてなにをしなければならないか考える。②福祉のまちづくりを進めるためには、人づくり、仲間づくりが必要であり、そのためには学習が必要であることを理解する。③学習を通して、社会福祉の制度、サービス、活動などについて知るとともに、日常的な生活課題を解決するための方法を身に付ける。
- 35) 講座案をつぎのとおり提案する。基礎講座として、①地域福祉全般の知識②地域福祉の担い手としての自己の確立。また、専門講座として、①事業マネジメント②コミュニケーションの技術など。

- 36) 「ふるさと練馬」を大切に想い、語り継がれる伝統・文化をいざなうため、練馬の歴史と地域の想いをプログラムとしたカリキュラムを提案する。
- 37) 区の福祉課題が分かるようなカリキュラムを作ってもらいたい。

(3) 期間、授業時間

- 1) 2年の学習期間を設けるのであれば、1年目は現場で共通することを学び、2年目は学生が関心のある分野について学ぶということも考えられる。
- 2) カレッジの授業時間を何時に設定するかということを検討する必要がある。
- 3) 施設見学などを考えると、昼間の授業が主体となると考えられる。
- 4) カレッジの主な対象が団塊の世代の方であれば、昼間の授業は難しいのではないか。団塊の世代の方の多くは、60歳を過ぎても仕事をしているのではないか。

(4) 講師

- 地域の実情を知ることは重要なので、共通のプログラムとして設置することに賛成である。そのためには、大学教授とは別に地域活動に取り組んでいる人を講師として迎える必要がある。

10 広報

- 1) 沢山情報を流さないと事業の参加者が増えないのではないか。
- 2) 団塊の世代を呼び込むためにはどう広報していくのか考えなければならない。
- 3) カレッジを広報する場合、記事を区報に掲載することも大事だが、パンフレットを作成するなどのきめ細かい広報も必要なのではないか。

11 その他の意見等

- 1) 住民の役割はこれ、専門職の役割はこれ、と言っていると議論が進まない。必要なことがあって、それをだれが責任を持ってやれるかということから役割分担が必要となり、具体的な課題が見えてくるのではないか。
- 2) 空いている商店や住まいを現場体験の場、地域活動の拠点とすることができないか。

- 3) 入り口と中身が大切ではないかと思う。目指すものがはっきりとした集まりだから、受け皿を自分たちでつくるのが可能だろう。問題は入り口を広げることである。また、地域を出口とすることが大切である。
- 4) 団塊の世代の方のみをカレッジの対象とするのではなく、地域福祉に関心・興味のある方も対象としたほうがよいのではないか。
- 5) カレッジの授業をケーブルテレビで放映できないか。放映できれば家庭に居ながら学習が可能になるとともに、区民の関心が高まるのではないか。
- 6) 区ホームページ上に授業風景などを映像で流せると、区民の関心が高まるのではないか。
- 7) 授業料の減免措置を検討して欲しい。
- 8) 授業の内容や講師が充実しているなら、年間3万円程度の授業料は決して高くないと思われる。授業料を無理に安くして、授業や講師が貧弱になると魅力がなくなるのではないか。
- 9) 授業の聴講ができるとよいのではないか。

2 (仮称) 地域福祉パワーアップカレッジ 検討委員会の開催経過

回数	開催日	主な検討事項等
第1回	平成18年7月24日	<ol style="list-style-type: none"> 1 委員委嘱 2 委員長の互選、副委員長の指名 3 委員会の所掌事項等について 4 カレッジの位置付け、イメージについて 5 スケジュールについて
第2回	平成18年8月25日	<ol style="list-style-type: none"> 1 地域福祉(活動)の現状と課題、必要な人材像について 2 カレッジの位置付け、目的について 3 カレッジの機能、特色について
第3回	平成18年9月21日	<ol style="list-style-type: none"> 1 必要な人材像、魅力あるカリキュラムについて 2 地域福祉活動団体、大学、社会福祉法人など地域資源との連携について 3 育成した人材を活かす仕組みづくり、仲間づくりについて
第4回	平成18年10月18日	<ol style="list-style-type: none"> 1 委員長からの課題について 2 中間報告書たたき台について 3 カレッジの学生、履修期間、コース、学習環境、運営などについて 4 カリキュラムの内容、作成方法について
第5回	平成18年11月15日	<ol style="list-style-type: none"> 1 (仮称) 地域福祉パワーアップカレッジ検討委員会中間報告案について
第6回	平成18年12月13日	<ol style="list-style-type: none"> 1 区議会における中間報告書に関する主な質問・意見・要望等について 2 (仮称) 地域福祉パワーアップカレッジ検討委員会報告案について 3 カリキュラムのイメージについて 4 カレッジの名称の考え方について
第7回	平成18年12月19日	<ol style="list-style-type: none"> 1 (仮称) 地域福祉パワーアップカレッジ検討委員会報告について 2 今後のスケジュールについて

3 (仮称) 地域福祉パワーアップカレッジ 検討委員会の設置

平成 18 年 5 月 31 日

18 練福高第 366 号

1 設置

地域福祉を支える人材の育成および育成した人材を活かす仕組みづくりを目的とした(仮称)地域福祉パワーアップカレッジ(以下「カレッジ」という。)に、区民および識者の意見等を反映させるため、(仮称)地域福祉パワーアップカレッジ検討委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

2 構成

(1) 委員会は、つぎに掲げる者で区長が委嘱する委員 16 人以内で構成する。

- ① 地域福祉に識見を有する者 3 人以内
- ② 地域福祉を実践している者 7 人以内
- ③ 公募区民 6 人以内

(2) 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

(3) 委員長は、委員会を主宰し、委員会を代表する。

(4) 委員会には、委員長が指名する副委員長を置く。

(5) 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその職務を代理する。

3 運営

(1) 委員会は、委員長が招集する。

(2) 委員長は、必要があると認めたときは、委員以外の者に委員会への出席を求め、意見を聴き、または説明を求めることができる。

4 所掌事項

委員会は、つぎの事項について検討し、その結果を区長に報告する。

- ① カレッジの基本的事項
- ② その他委員長が必要と認める事項

5 委員の任期

委員会委員の任期は、委嘱の日から区長に報告する日までとする。

6 庶務

委員会の庶務は、福祉部高齢社会対策課で処理する。

7 公開

委員会の会議は、公開で行うものとする。ただし、附属機関等の会議の公開および区民公募に関する指針(平成 13 年 2 月 27 日練企企発第 245 号)の定めるところにより非公開とすることができる。

8 その他

これに定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は委員長が別に定める。

4 (仮称) 地域福祉パワーアップカレッジ検討 委員会委員名簿

(敬称略)

選出区分	氏名	役職等
地域福祉に識見を有する者(3人)	◎ 市川 一 宏	ルーテル学院大学学長
	大 枝 奈 美	特定非営利活動法人サステイナブルコミュニティ研究所主任研究員
	○ 中 島 修	東京国際大学人間社会学部専任講師
地域福祉を実践している者(7人)	池 本 泰 子	特定非営利活動法人保育サービスぽてと代表理事
	岡 正 博	福祉のまちづくり総合計画策定委員会元委員
	木 原 勇	財団法人さわやか福祉財団プロジェクトリーダー
	古 泉 厚 子	大泉養護学校PTA会長
	篠 園 彦	栄町町会長
	山 本 小百合	認知症予防推進員
	山 本 雄 一	特定非営利活動法人シニアふれあい練馬会長
公募区民(6人)	大 澤 親 紀	関町南4丁目
	鎌 田 佳寿子	豊玉南3丁目
	椎 名 ひろみ	北町2丁目
	高 橋 寛	旭町2丁目
	南 雲 正 男	東大泉1丁目
	福 井 倫 子	大泉町2丁目(西東京市)

※ ◎…委員長、○…副委員長

[計16人]